



門へ遠 13  
 籍 2208  
 卷 3



星月夜顯晦録初編卷之三

目次

番場忠太密書を製食討死

木村信實武勇番場忠太の書

三浦工藤箱谷梶原の討手にて追討

星月夜顯晦録



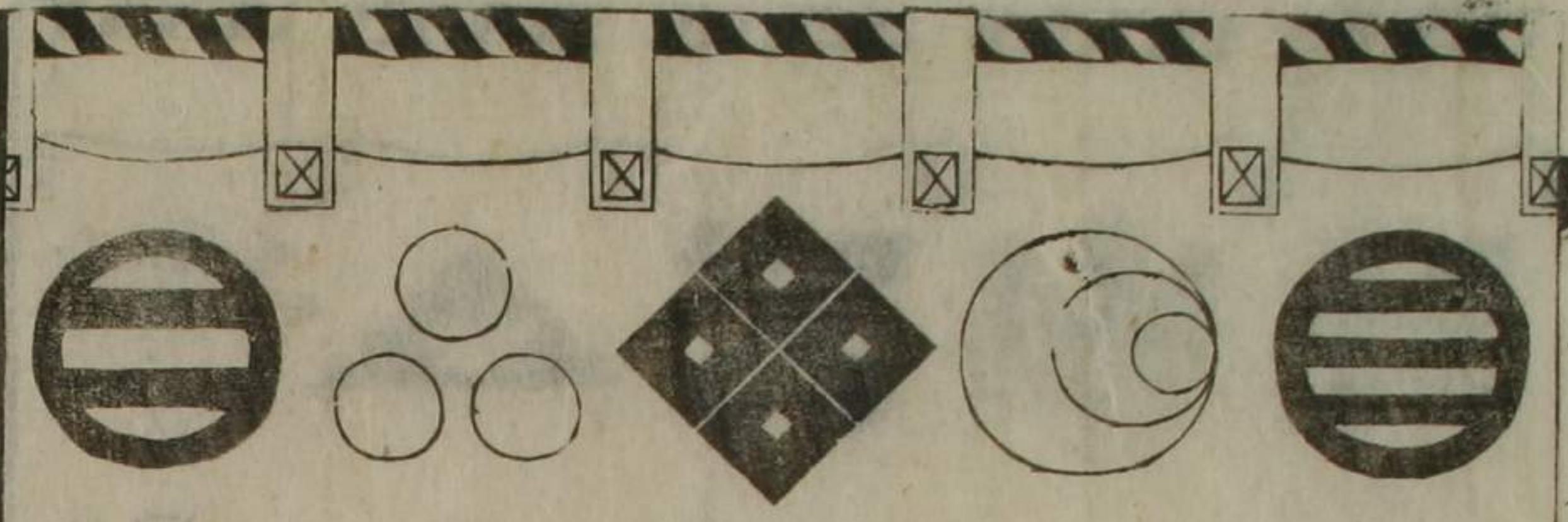
梶原景時父子駿州清見が討ち最終合戦

梶原景時一家滅亡の圖

勝木則宗芝原長保が擒

安房判官代隆重臆病の圖

芝原太郎落人とうりて江原の呻吟圖



星月夜頭 晦録卷之三

番場忠太密書を裂食く討死す

四方不使し君命を辱しあざけ士といふ聖語番場忠太を以て  
是も充べし六波羅を呼出され思慮工夫は及ばぬ程もあらず即ち不  
義を明し演説し二言のまゝうらぐん城の中を祝せし天暗の夜をうら  
ぐん城の跡を定規相摸守ふ計し番場が陳謝のついでにやめし  
惟もいさぐちあちの景時腰の印もあらず智辨務まゝめしとす今日  
その実をえり彼が言結理の端々ゆめまじも全く信に既に藤倉  
より内意のつら景時が一族郎従上京せし吟味せよとのと彼が  
甚と不審とす聊由影さす悲しとす特定彌完尔と笑ひ  
某も左を存す然と情の烈火をく渠が志を安んずる下向の





物あつせよとやせんの謀の種之彼の刀を欺きて脱の群をえせ下向の  
節らるるべ知せんとかせんの偽の下るる人我亦志らるる分ありと  
ハ何ぞ下向の茂を尋ぐらばらるる場あつて結合なり此場を  
通せん為のこ明日の夜由斗がけしむ此方を用てやけんとき  
先物の用こまへさす火吹くたがが逃下らん板子を伺せ扱又定細が  
願ふは及海道筋へも人を配遣一族郎従亦も謀斗をや合た  
たを生捕用意をうらるるたたと兵口を吹く。席は火通をぬるれ  
どもや暫時も控ゆるらるる由仙洞へ入り守護人亦も外ら  
ナ祝の祝まぐ。中上早く下向仕ま由放るる法皇亦も發らるる  
早速の暇あり。則ち密書を下され。大お戻び退出。直小  
徳國の用をさるる。家来三人が。一亦も立て人目よ授り

つくと一人つ隠し主境の宿あり。生會んと約。正月六日。東雲つ  
さるる都を立急ぐ。夜ふ午の刻なり。お殘の宿あり。是より主後  
四人急ぎの道るれば。探ありん。馳行。如江及一國佐。木の下新あり。  
海道へもさるる山路細る往來のるる。如の悉く家来を遣。並登  
夜も。せ四民。その旅人を改させ。中定細。刑部。照経。高依。  
木盛。綱が。嫡男。太帛。信実。亦。自。刃。付。と。く。鎌倉の。法士。お。訓。と。る。み。  
を。擇。び。支。へ。吟。味。せ。む。信。実。々。去。建。久。二。幸。交。年。七。月。先。君。お。朝。  
卿。の。前。あ。く。ユ。多。袷。経。が。額。を。磔。を。み。て。打。傷。その。場。を。追。上。和。田。  
美。盛。を。頼。こ。に。勇。敵。を。感。し。ぞ。の。火。斗。の。信。実。を。救。へ。ん。と。も。鎌。倉。に。  
あ。る。り。火。燒。り。暫。く。遠。國。へ。遣。へ。ん。と。火。又。盛。綱。亦。も。中。含。る。る。の。上。方。へ。  
遣。し。兄。定。綱。を。頼。こ。江。州。に。遣。時。節。を。え。合。の。免。を。授。け。返。さ。し。



居るふその勘佐と木定細山門の元従木が教所不似と亦依を置れ  
 薩多配統せし信実由流浪せし依佐と木の一族木村源二と云  
 りの江及の内を領一在るが信実と云方へ川取也抱三ヶ年を経  
 る久建久四癸丑年の考定細勅免を著りてくバお軽やん悦  
 の所領を悉く終一とす由江及佐と木の庄又還住と云  
 信実由伯又定細か方へ帰しその後木村一子と云友信実を養子  
 せんて成と云定細由甥と云舎弟盛綱と云預りの友私の斗ひ不  
 承と云盛綱へその旨やと云家督相統せしむた嫡子信実るん也  
 藤倉不並と云を承と云の年木村が女抱不預り辞退せん也気の  
 毒殊は同流の源氏也云早不似せと云終日木村が女子と云のり  
 終日由承と云と云依と云源三方と云藤倉へ祈へと云信実法必

を流浪一當國へ来ゆる捕並也。おの且前との罪を思免り下さるば  
 某が家名を嗣せ交ひり承る。頼朝卿元來佐と木一家の皆功勞  
 あり兼也。信実子流口外ありと云思しるおの。唯法經が半前元  
 の毒うりとのりや。信実が遂電をその傳捨と云。此節社經  
 の曾我社成同時致お討と云。木村が承を幸に免り。彼家督  
 へと云旨命せしと云。信実をより木村の家を相統一江及不在る  
 が此度定綱告ふ依と云。自ら強次へ出吟味を遂る如ふ番場と云家  
 来三人りつと云。積の駅を出離んと云。時信実が家來をさめ。何  
 國より何方へ通るりぞ。姓名を承り持条の取を改めく通と云と  
 云。番場より我木の東國の者と云。教度往返と云。此如り  
 関所あると云。何ぞ姓名を承る。木村が承り持の取を改めく通と云。







ゆふまじやうう。云はるまことや。番人オ昔ううの関所あつた。今年  
 今月。鎌倉より。今不依。改る。早々。懐中を改め。勢  
 通。と。奇怪。と。使る。通。と。  
 姓名を報。他の。却。悪。我。相州の住人  
 番。と。の。不用。西。唯。今。関。之  
 亦。の。曾。速。通。と。陳。人。を。鎌。倉。の。法  
 士。番。と。の。承。の。倍。臣。の。主人。の。名。を。名  
 の。と。や。を。怒。り。汝。木。竹。を。妨。る。や。鎌  
 倉。の。下。知。る。番。不。を。居。と。改。し。以。出。狼。藉。お。る。と  
 系。と。山。賊。盗。の。類。ひ。う。人。と。命。を。墮。と。と。う。れ。早。く  
 退。げ。と。言。る。番。人。オ。奴。憎。ら。う。か。言。る。擲。と。孔明。せ。と。と。や

二三人。一。同。お。ま。め。り。たる。お。ち。え。兵。道。手。練。の。侍。ら。れ。び。り。せ。び。二。人。を  
 左右。お。投。の。け。刀。を。抜。持。才。構。と。居。る。と。バ。三。人。の。家。来。オ。お。引。係。の  
 眼。を。配。り。お。お。折。し。ん。と。番。人。オ。是。を。見。と。相。罵。の。撞。を。撞  
 鳴。と。番。人。と。是。と。叩。こ。番。人。追。と。地。来。り。大。勢。と。る。お。お。即。信。実  
 お。お。馬。の。地。来。り。根。子。以。最。番。場。と。せ。お。お。提。原。が。密。使。る。と。ん  
 と。お。お。向。の。お。進。と。出。汝。の。提。原。が。家。入。る。と。ん。や。士。卒。オ。が。斗。は。鎌  
 倉。の。お。令。下。あ。て。私。る。と。ん。汝。理。不。可。通。と。ん。何。の。ぞ。や。番  
 場。お。と。お。淫。美。る。お。お。此。知。お。止。り。鎌。倉。の。下。知。を。待。て。通  
 る。と。ん。の。の。お。祥。お。孔明。と。と。と。と。や。と。ん。道。且。ぬ。云。沢  
 と。と。通。と。と。覚。悟。を。究。め。家。来。向。の。女。オ。一。人。と。り。此。知。を。道。れ  
 團。お。り。主人。お。次。才。を。注。進。せ。と。我。ら。お。討。死。せ。んと。私。結。懐。中。より。書



を取生しすふ裂く家合も股中一飲込今の云易しとち刀真向を見  
 めり推量のまゝ托原平三景時が郎ホ番場ちちの敵りの謙余  
 後の今もせよ武士の懐中振お吟味いさせぬれぞ汝ホ勇あが搦  
 て入ると呼りつと。大勢の中へおめひと近入り縦横に得お切穿信  
 実が郎ホ見れ討えんとち刀を替三合戦一が。ちち必死の切先共  
 勇猛お碎せ或の討せ又ハ傷を受るりの数多あり。中々近身はさう  
 一紙信実此群をえり血気の勇士あえ少ちちちりつと。ち刀を振て  
 番場お渡合ひ。入交おせと火花を散一戦一が。ちちち先刻より大勢  
 と戦ひちち勝せ叶ひさうさひ一が討死い覚悟の中へ万一生捕らと  
 てハ耻辱さう。いっちち自害せんと透り瓜何ひ信実が打ち刀を  
 拂ひのけと。搦階の林の中へさうと遁生と信実遁とあんと追行

知不番場が郎ホのち一人在り主人をさあせんと信実ハ馳向信  
 実怒くち刀振上げ。鉄壁も透せと切付とハ件の郎い手さ向乳  
 の下を折りとと。二つふるりて倒臥て此間又ちちの叢林をさうと  
 腹を切くお果えれハ某首を取此純京都の守護人ちち若あを  
 とハお操ち唯茂佐々木定綱妻曲を記し。謙余へ住進お及びたれ。  
 ちちちちと。托原か隠謀いさうお願せむるあ急一の宮へ討キを  
 見えしとえとのしが防戦お及ぶ。騒乱の基るるんちち謀畧を以て  
 珠裁あんと肉し。謙余乃及ぶの知安房判官代隆重と法と景時と  
 一味るるちちと。托原又子と二おあるるんと謙余を出し一の宮へ行  
 ち。此隆重ハ武畧あり。兵道もちちちちも景時が腹おめと。後業を斗  
 廻せし相州一の宮あちハ托原景時又子。京都の根子次亦上洛せん



と喜信を待ちしに小瀬倉より討手や来りしに百姓を攻め由せんとす  
 氷を履ぬる如く正月十八日の晩景畫塲が家来を人幸ふく逐放  
 了江別境の宿あり。右々討死の根子生進もあぞ景時大不敵と見  
 作天よりかき京都の首尾を尋ねる小中権太左衛門尉は六波羅へは  
 うも主人結云取とす。その小中権太左衛門尉は京都の還道危あり仙洞へ伺ひ  
 るとハ早速の暇あり。作書を懐中し。尚月六日始をまき江戶に至  
 る亦志つぐの次才あり。止し成ゆると作書を川裂枝中へ送り。自  
 害するべしと始後委く語り。その小中景時貞致も貝海と押し上洛  
 せば右々討死はさせず。死を可惜勇士は共ひしと残念と云はし  
 右々死を待たし。所書を飲込し。天晴の根田夫と奪りね。ハ  
 隠謀ありおるべし。京都の首尾宜し上ハ二時より早く上洛せんとす。

又度より如く翌十九日安房判官代隆重謙倉よりおあり。右々討  
 死の子疾謙倉のゆえ陰謀を顕あ付今も討手あり。殊り謀  
 斗を以て討手と名づけ。周章と告ぐとハ景時終今宵盡  
 小此知を為んと。日の暮るに今やくと付つけ成の刻あり。ハ洛  
 兵糧を腰あつけ。隆重の如く。一の宮の不領を主夜を犯して急ぐる  
 景時一族即ち向ひ。是より路次の間小怖る者ハ駿河國吉香  
 小次郎之彼西へ通る人あり。を慎まむ。ハ女ホその旨  
 云約と下知し。りりりりり。地より。ハ不聖日同國の住人原惣  
 三郎。托原が流り。ハ火災。謙倉之飛押を立此上へ住進を用て  
 追手代まきえと。三浦平六兵衛尉。村和屋右兵衛尉。右季  
 二差小次郎。ハ先令。ハ景時追せ。此輩は勇共。ハ日の午の刻





三浦  
 二藤  
 粕谷  
 梶原  
 討平  
 追行  
 音



鎌倉を去馬に鞭を加へ飛かまく追ひたる。

梶原景時又子駿州清見が園に定むる

此時梶原又子主従五十餘人息由継ぎ急程十日交刻に後を清見が園不到る如く當國の住人坂田の郎若原小次郎三郎三郎大内小次郎其外甲乙人打あり今日終日群集し賭的を討夜お入る由火を照し勝負を争ひ在が所終退散せんと弓箭擔る如く揃り梶原又子出合たり此輩大に怪し今時を大勢馬に早め通る者ぞと咄々不薄の穂ふく時るれば夜に振し休死ころ成おらそ曲者るれと終に携し弓押張散ふ箭を討り追と甚急なりしふ系時をえ退ふ悪うる人追散し通しと下知し狐が啼ふ返り同じく矢を發ち挑む我に如く當國の武士

香小次郎友景解就三郎深川次郎矢込小次郎其外追ひ馳せたる

一和あるり相残ふ香小次郎大音上夜中るれば互に面をまぶど。おとぐ討とも討とも姓名を各々の勝負せよかくは當國の住人香小次郎友景なりと知りうは味方のめいも我もくと各々多。梶原包お知る。三郎兵衛尉景茂真先不とと出優く由不不用りあつと急ぐ。かくや某の系時が三男三郎兵衛尉景茂と悉く討捨と通る。とやゆのへも梶原とを討ふ。もる。死客入る。お松と鎌倉よりへ辺から通る。とが勇敢を。養老と。下知る。夜陰としひ俄のり。は。死を。お松は武勇の。と斗瓜振アえと。は。双方向に振る。此句の。



すると我山中不取田入部後小景茂討退る如く吉香小次郎友  
 系茂系系茂不渡り合互小名をく打合が夜半る比月の光り白  
 馬の正くち刀筋明あし。双方ゆある勇士るんが暫く勝負ありり  
 か系茂のより打ち刀を。小次郎ゆりやとふとつぐと系茂が刀を  
 侍るる並樹不切込り。小次郎ゆりやとち刀のむねあし系茂が拵る  
 腕をあらうし不打ち且バ大カ小打。この系茂腕も疼痺る。思ひ  
 ち刀次系茂と吉香透るち刀次捨馳り。系茂小次郎と細志が  
 操合接合命が系茂の夜由藤正遠流を我公勇力と食由不保  
 せり由系力旁と。組伏ら且終小首次ととる。吉香小次郎友系  
 大音小梶原三郎系茂を討死りと呼且バ味方いしく勇進  
 梶原方のち小駁馬一騎當千ととひ。系茂討死せし由系力を為

一士五十以上は海失たり。系時の愛子以討せ退くるを扱る。子次郎  
 亦小下知をば必死と知く攻敵。嫡子源左左衛門尉系季亦平次左  
 衛門尉系高両人。又とる獲。山を堀小弓矢を取。元猪は免  
 らる。討る中あ系季の馬の達人鎌倉八人の討者その一人とてあ  
 九死一生の場。秘術を号。矢継早に討らる。仇六のあが  
 こと敵討さくゆれ。進兼と見え。如六郎系國七郎系宗八郎  
 系則亦勇とあつ。討退し。甲乙人亦支兼と見え。吉香小次  
 郎も見え。謀略を必ひ付。所竟の討手十人半を後の山。味方  
 討る。系時又子か取。中へ雨のどく討込。系時駁馬を  
 後を防人ととる。間。吉香小次郎。真先進。船載。若原矢神  
 河川の勇士前。攻討。梶原兄弟並を立兼。如く國中の武士



受つけく追々絶る。とそ不大勢とる。其被之攻より速路は芳より  
 握原又子勢力は弱く。系則系宗系國系連追う討死し逃殘さ  
 郎亦由枕を並封せし。系宗又亦向ひ実早叶ひゆし。下郎のま  
 けり。武士競ひ集る上切拵えし。今日日生延は運を咄く  
 けもあへん。途中小自害せしこの口惜き。ゆねく。ゆねくと  
 とも所存あり。上信とる。是れ命ある。道は道。道は道。道は道。  
 と。嘲を受んと。未成近の山掛り。斯く果くと。是非なる。是れ  
 又子三人山の民。不隠也。系時。夫主石出。時世の一首を。絶し。其  
 武士乃覚悟も。時をせむ。ゆねく。ゆねくと。ゆねくと。ゆねくと。  
 と書く。禮の袖は。ゆねく。ゆねくと。ゆねくと。ゆねくと。ゆねくと。

小知も且公靜小自害し。ゆねく。ゆねくと。ゆねくと。ゆねくと。  
 か首を討て。地中埋。ゆねく。ゆねくと。ゆねくと。ゆねくと。  
 生年三十九。系會。系時。夫主。石出。時世。の一首を。絶し。其  
 系郎亦由。枕を並封せし。系宗又亦向ひ。実早叶ひゆし。下郎のま  
 けり。武士競ひ集る上切拵えし。今日日生延は運を咄く  
 けもあへん。途中小自害せしこの口惜き。ゆねく。ゆねくと。  
 とも所存あり。上信とる。是れ命ある。道は道。道は道。道は道。  
 と。嘲を受んと。未成近の山掛り。斯く果くと。是非なる。是れ  
 又子三人山の民。不隠也。系時。夫主石出。時世の一首を。絶し。其  
 武士乃覚悟も。時をせむ。ゆねく。ゆねくと。ゆねくと。ゆねくと。  
 と書く。禮の袖は。ゆねく。ゆねくと。ゆねくと。ゆねくと。ゆねくと。



其由名住人オ、素時又子ヲ討テ始終ヲ訴ル。此輩ヲ  
 討テ、あひらふも、討テ、あひらふも、討テ、あひらふも、  
 鎌倉ノ御所ニ入リ、安房判官代隆重ハ、素時隨一の大  
 臆病ヲ、素時ノ生得ナリ、素時ハ、此如キ、素時ハ、  
 合戦始メ、一番ハ、逆進人トセ、知不敵ナリ、討テ、  
 疾ヲ、素時ノ身ヲ、一上ノ、素時ハ、痛ム、  
 爰ニ在テ、害セ、素時ハ、素時ハ、素時ハ、  
 ツケ、素時ハ、素時ハ、素時ハ、素時ハ、  
 高シ、素時ハ、素時ハ、素時ハ、素時ハ、  
 害メ、素時ハ、素時ハ、素時ハ、素時ハ、

夜前、素時ハ、三時を、素時ハ、素時ハ、  
 大ハ、難義、素時ハ、素時ハ、素時ハ、  
 あり、素時ハ、素時ハ、素時ハ、素時ハ、  
 腹、素時ハ、素時ハ、素時ハ、素時ハ、  
 散、素時ハ、素時ハ、素時ハ、素時ハ、  
 時、素時ハ、素時ハ、素時ハ、素時ハ、  
 輝、素時ハ、素時ハ、素時ハ、素時ハ、  
 射、素時ハ、素時ハ、素時ハ、素時ハ、  
 あり、素時ハ、素時ハ、素時ハ、素時ハ、  
 ころ、素時ハ、素時ハ、素時ハ、素時ハ、  
 帰、素時ハ、素時ハ、素時ハ、素時ハ、







至極と存る如くやうくの癖あり。梶原が余れを成りしんば彼一人さうた。  
 生捕り面目のふく似たり。よろしく熱くとも取辨不捨事。ことやせん相谷  
 右季大少收ひおとす。汝亦さうくお斗へと。即ち立六人を残し。重光右季  
 の諸士ととりお。鎌倉へ立寄。六人の老た木蔭の隅と伺ひ居る。い。次  
 隆重もあつた。軍士も退散とす。掲より這下る。年足癩  
 痺。赤むと袂と忙お。う。とある。知を。六人の即ちたさう。身。竹の若も  
 う。取。押。搦。う。隆重大に驚れ。さうと忙然。皆く言。句。も出。さ  
 へ。彼。又。身。く。り。即。ち。隆。重。も。向。ひ。女。侍。者。ま。れ。掲。不。隠。刺。我。亦。も。臭  
 気。を。洩。俗。し。と。奇。怪。と。匂。り。ま。じ。が。隆。重。幾。慄。返。答。も。及。び。ま。天  
 を。作。く。大。お。致。し。我。一。時。の。死。を。道。人。と。く。一。昼。夜。の。困。窮。辛。苦。  
 虚。く。お。り。る。形。勢。と。う。し。と。天。う。る。我。今。う。る。我。と。悔。る。六。人。の。の

大時り笑ひ。お。夜。前。う。垣。忍。び。一。法。き。男。う。る。洩。尿。の。聲。終。由。中。々  
 と。戯。さ。り。く。鎌。倉。へ。と。り。ま。り。武。士。の。身。あ。り。死。ま。じ。時。不。死。せ。が。れ。い。死  
 お。増。る。耻。め。り。と。い。お。り。ま。り。お。か。こ。を。隆。重。せ。せ。る。京。時。未。と。俱。不。自  
 害。せ。一。味。の。悪。名。を。承。る。も。お。か。こ。を。い。か。し。と。笑。る。も。め。り。ん。又。皆。時。の  
 命。を。惜。む。臆。病。比。奥。の。笑。の。と。う。う。我。お。背。を。思。を。失。ふ。の。挙。動。淺  
 中。に。次。者。う。り。お。く。と。三。浦。受。村。以。下。箱。谷。ユ。藤。路。石。の。住。人。亦。を。伴  
 ひ。鎌。州。を。お。立。上。り。月。廿。三。日。鎌。倉。へ。歸。る。此。度。京。時。討。手。と。し。て。鎌  
 州。へ。と。馳。向。へ。の。外。彼。地。の。諸。士。亦。早。く。も。一。戦。お。る。び。梶。原。又。子。一。家。滅。亡  
 の。う。り。お。上。る。會。戦。の。次。中。若。原。第一。番。不。攻。討。梶。原。六。郎。八。郎。を。困。入  
 手。へ。討。取。飯。田。の。即。ち。手。へ。梶。原。系。茂。が。即。ち。兩。人。討。取。る。の。身。死。存  
 香。以。席。自。京。茂。を。討。取。渡。川。次。郎。と。梶。原。系。三。が。家。入。四。人。討。取。



夫邦平次が手へ托承京時京高が首級を取取弼弼三郎が手  
 托原七郎同郎ホ一人討えユ八郎が手へ托原九郎を討え  
 大内小次郎が手へ郎ホ一人討え三次次郎が手へ郎ホ三人討え  
 捕高名々々不書記上上は羽林家は少少少少少少少少  
 それ不恩賞を由りの中も吉香小以郎友京日以勇名ゆえめりし  
 小遠のよ京茂を討え天晴くと山威のめりし托原が舊領の内  
 播州福井の庄を由りしは面目月お勝り受えり小以郎友京が孫  
 徳高の時安藤國へ下向し大友平庄を領し永く彼國に住し後  
 世近賢榮申り京時又子滅亡不及び類族救号京都おめりし  
 在京京京とて使を呈上三年三親永不命せられ且早速上  
 洛し唯是定綱ホ高令以達しとらふ京時が吉身刑部殿朝

京々去年十二月京時と俱不歸命を追放せよと元々そのお足  
 不相違し隠謀の中細せし隙念を告げ御中京時不練言せし御用  
 せしと一の宮より御計をたしと由り相京一の宮より人  
 妻子を以連京時又子不離と山林に隠し入時節をえ合々今  
 度京時が余類を殺し尋らるるを搜し出され恥辱之と隙念を  
 類と云藤小以郎初光お然と兵具を奪り京時ホ一味仕ごとく之を  
 叔し兄牙よりある疑ひあへんは次思は再出る如く宜く礼明を  
 遂らし且罪科ホ不せしとて所々初光の底を蔵し兵具を討り  
 此旨授あられが老臣ホの評定お便とて和田茂盛白田山重忠ホ  
 命せし朝京と云藤初光お討並走たりその外京時が伴友を  
 尋ねらるるとし中流初光お討り相犯せざるも刑部殿朝京不



尋ね下されども。元より企組せよ。ある存せざる。外種。空賢の  
 半段を尽さる。如月八日の夜。伊沢。信光。甲斐。國。より  
 馳系。住進。一。族。武田。右兵衛。尉。有。美。托。原。が。約。盟。不。復。上。洛  
 せんと企。承。り。不。付。子。細。を。問。人。が。為。彼。館。不。行。向。不。系。時。賊。亡  
 を。受。恐怖。仕。事。も。由。途。亡。移。方。を。不。家。内。人。も。死。由。普  
 捜。索。不。系。時。が。贈。如。の。書。簡。め。り。同。意。せ。糸。勿。論。う。へ。二。族。の  
 不。義。面。目。を。失。ひ。忍。入。と。ゆ。ゆ。多。早。速。住。進。仕。と。件。の。書。簡。を。は。し  
 出。と。大。江。廣。元。披。見。め。不。滇。西。の。然。は。以。結。り。為。同。意。の。面。追。く  
 上。條。と。さ。言。以。告。知。と。の。文。通。あ。く。一。味。の。單。の。姓。名。於。之。と。族。を  
 紀。之。廣。元。見。終。く。大。お。悦。び。置。と。も。此。書。簡。を。手。不。入。る。天。の  
 与。と。之。中。同。意。の。姓。名。不。務。未。七。郎。則。宗。を。書。記。し。あ。る

ゆゑ容易。此。書。面。ハ。披。あ。る。先。老。臣。亦。と。内。続。不。入。る。密。不  
 羽。林。へ。上。と。思。は。せ。る。その。衣。不。務。未。の。羽。林。の。進。士。あ。く。大。力。が  
 双。の。壯。士。東。國。一。の。角。力。の。名。人。之。り。此。義。家。取。と。之。い。つ。る。害。を。あ。る  
 人。も。例。が。二。三。あ。取。逐。と。の。再。び。捕。と。る。勇。士。也。名。密。不。搦。捕。人。の。之  
 羽。林。此。義。を。之。名。則。宗。の。企。組。せ。ん。と。之。以。儲。と。る。之。名。若。言  
 の。別。士。仕。損。と。之。扱。不。生。捕。と。之。と。令。せ。る。廣。元。彼。を。生。捕。の。謀。を。す  
 上。と。是。一。の。以。承。知。め。く。二。月。二。日。中。世。二。郎。能。成。を。以。て。務。未。七。郎  
 不。捕。手。ハ。波。多。中。三。郎。と。定。め。之。則。宗。君。の。前。出。バ。羽。林。の。役。に  
 入。め。と。ん。夫。を。相。留。不。須。及。之。と。下。知。有。以。用。之。の。為。昌。山。重。忠。を  
 候。せ。め。之。用。之。悉。く。備。り。

勝木則宗芝原長保被擒



勝木七郎 石不依く。何なるく出たり。君前不跪く時。君仰出る。
 相す。作座をまき入め。とん中と波多也三郎 盛道法勇乎これ
 の仕するが。則宗が後不あり腕鉄より不殺と抱く。則宗愕き振返り。
 竹友不礼せしとと立上りんととら。盛道のませと。細多を伴ふ。
 捻伏んとたれども。則宗を奴の曲者るん。右の手次拵ひ抜く。短刀
 を引ぬ。後さぬ不突んとと。重忠をえく。互に傷死羨せ。と。右
 せ。短刀揺もせん。居るが。左の手次見延。則宗が刀又腕不取そえ。
 殺と握く。放さば振離えと。りけども。坂東の力者と。やえ。す。
 不抱ま。と。牙伴の盛道不抱と。と。の。則宗いんと。
 と。の。能の。重忠又。生捕せんと。握く。腕を力不。折曲
 ぐ。則宗。總免。忙。勤と。能。後。盛道。易くと。生擒

ころ此間。石不居る。の。振舞。を。希有の。力士。則。け。上
 なる。和。田。美。盛。不。預。と。是。礼。問。と。き。の。り。由。是。美。盛。侍。死。か。わ。く。
 則宗を引出し。武田右兵衛尉有。変。送。る。景。時。が。書。簡。を。え。せ。の。
 企。を。な。く。る。族。を。尋。ぐ。不。則。宗。が。云。系。時。鎮。西。を。管。領。と。は。宣。旨
 を。の。り。と。号。し。京。都。の。再。會。せ。む。べ。た。旨。九。州。の。諸。臣。一。族。へ。触。送。り
 たり。の。と。某。方。へ。む。の。親。中。裁。け。は。是。元。の。実。を。存。せ。書。信。を。
 姓。各。以。裁。と。る。一。族。の。端。ら。が。あ。る。と。ん。系。時。滅。亡。の。上。一。族。に
 列。す。某。の。ゆ。ゆ。殊。を。交。す。と。思。う。さ。る。く。や。あ。ぞ。盛。此。者。の。携
 問。と。る。と。も。不。実。を。い。ふ。た。め。の。不。わ。く。と。再。び。尋。不。及。と。の。旨。
 披。あ。せ。今。皆。く。預。並。び。さ。る。仰。渡。さ。る。内。同。又。自。美。成。血。を
 改。め。侍。下。の。別。當。職。不。補。せ。る。此。職。と。治。義。四。子。謙。念。究。初。不







補せり。建久三年。京時一日借へきり。中て此職不仕り。その後  
返る。利奸謀を以て加役と号し。私ひを遂りてより。双葉今直  
法士の別當を兼帯して任り。京時滅亡せり。ふりて元の如く  
茂盛一人不命。内不之聖六。則家が罪科あり。びも彼等則盛道  
務末七郎を生捕し。恩賞の沙汰あり。ぬも眞登久内とのみの盛道  
不宿意者て彼が恩賞不致。ふりて嫉妬。務末を生捕し。盛  
道手柄あり。白山重忠の高名あり。り。重忠の合力あり。り  
其の盛道の則宗を害せり。ては。之を搦めよとのぬ斗よとて  
ゆさせ。又生捕人の三友の小見と云々。難ゆ中。持多不竹を人乃  
助力を清り。り。盛道一友の功と罵り。恩賞を貪るる。甚ど。理  
る。と。終言せり。ふ。羽村のい。彼不達。り。と。礼向。と。と。石の壺の

い所不於。重忠を。真聖久内か前あり。始後の義を。其の  
同せぬ。重忠弟の。仰も存せん。盛道一人と生捕し。り。り。及び  
い。某。待。退。去。の。後。多。子。細。存。せ。と。と。や。あ。そ。重。忠。か。や。上。の  
盛道が。手柄相遠り。と。定。ぬ。ひ。多。重。忠。の。早。速。清。前。を。立。て。此。の  
間へ至り。其の聖を呼ぶ。や。なる。は。下。切。の。ぬ。の。後。言。ハ。を。益。る。ぬ。を  
す。の。り。弓。箭。不。立。障。者。の。習。ひ。撲。ぬ。る。ぬ。を。奉。さ。と。と。若。け。切。動。心  
切の賞を云ふ。怒りの。終言あり。ふ。直不則宗を生捕し。り。や。さ。じ。  
る。ぬ。も。重。忠。が。名。ぬ。う。と。折。へ。ら。る。や。盛。道。を。を。父。が。某。か。言。せ。し。  
未練あり。と。笑。ふ。べ。い。彼。等。母。の。奇。代。の。勇。士。と。る。ぬ。も。重。忠。が。力。を。借  
へ。ん。や。その人を撰び。命。せ。り。り。ぬ。の。捕。人。る。る。不。搦。め。り。と。り。つ。づ。  
君の。目。が。私。相。遠。の。誤。を。觸。る。道。理。を。忠。臣。の。志。ぬ。ぬ。と。ぬ。ぬ。も。盛。道。が



武道を失ふことの後口非道至極なりと散々叱り憤りたるあり。眞望  
 久内も重忠が定むればつとんと多し。案相遠怒り言なるも赤面と言  
 句も生じ誤入する群く。重く是下慎まめ武勇の道に忠と義を才  
 一と。たとえ思む者ありて君の為に功の賞と俱ふ吹率ふめべし。  
 是れを之を私に宿意を以て化の功を妬ま妨ぐる門徒の小人なり。今日の  
 倭史に於てははるるありと教訓せしむるに望み重忠の信義不恥入り。  
 後悔せしむる尋常の者なり。自才の高名おせんと吹聴もよぶるに  
 不恥しむる。信義を廢る賢士も多し眞望を招き密に教訓せしむるに古  
 今例なき武士といふべし。既勝木則宗生捕はけ外の餘類の上方西  
 國に在る。謙倉と静濫お及び。これ移るに原系時が企組せし。  
 安房判官代隆重を回縛し。相谷右兵衛尉が手取り。倭を執せ

う。即時に拷問せしむるの如景時が密謀悉く白状お及び在後倉  
 の伴類や。明白お知る。追々捕生し。則宗隆重を免。数人を  
 刑戮せしむる。時先頃自ら祈生し。宗時が舎才。程原刑部  
 朝景と兄の逆意お同おせられども。親族のありれば殊せむる。老  
 臣の改めしむると問せむひる。和田左衛尉茂盛のいり。彼はは  
 く謀逆人の兄弟と云せしむ。兄が謀反おせむれば。殊を加ふ  
 べし。いふく。親子兄弟。教味方と別し。例除く。やむ。又兄逆を  
 めりとも末子の忠を守り。その倭お同せむれば。一族ありとも賞賜し  
 るべし。政道の実するべし。某又移り朝景が眞實を察する。小悪  
 意のたのめ。此度由兄お離し。山林お隠し。黨類。空方。取金あり。と  
 自ら祈る。頗神妙の挙動あり。移れば彼が罪を宥む仕まつ。



仁惠の仇少汰るる。彼一族都々刑せし中、先許を  
 聚る不忠の者を知りて、知るれば朝景武門の面目有らざる  
 孫太郎を初めんとす。諸臣此依を之と同。此段中上げれ  
 る。朝景恩免を乞ふ。不領を安堵せり。久々君恩の厚きを  
 感し、且、茂盛の一言を深く悦び、武道を主とする。此  
 恩一生忘るべしとす。梶原が血脈未だ残る。之を此時和田が  
 一言おぼる。如く朝景を乞ふ。忘る。後年和田合戦の初、茂盛  
 が味方とする。情人の為なる。その骨髄を徹し、悦び、その  
 生涯忘る。人間のなほ、心を施すとす。仁の道なるを。又此度京都  
 へ、法皇梶原が賊亡を乞ふ。及ばず。殊に彼逆意あらず。仙  
 洞へ奏し、院宣を乞ふ。清しと風吹さる。後念より、いづるは、汰る

とんと。慮を憐れむ。如く唯何とす。梶原神公の御珠を如く  
 採余我を穿致金のつ。美聞あり。禁中へ對し、別な奏とす。エス  
 たり。聊宸襟を保ち、身を隠念の諸臣の拜せ。法皇乃  
 ち方遣はさん。却て強乱の端を動さんと。唯々京都を重んじ  
 る。ぬ静おせ。深き。久々禁中より。地下人へ余類吟味とす。  
 旨命し。久々大内相摸守惟茂。佐々木左衛門尉定綱。前掃部  
 頭。又、木下知を。法皇兵侍基清。佐々木定綱。嫡男廣綱。五人  
 を。先皇時。五條坊門の宅を破却し。即ち木下。定綱。掃部頭  
 如。播磨國の守護職。芝原右衛門長保。系時と一味。京都西園  
 寺。白状あふ。即時に長保が館へ押寄し。久々長保由  
 京時が亡く。久々。今朝京都を生奪し。仍方を。久々。本國





芝原十郎  
 落人と  
 江戸又  
 呻吟  
 音

星月夜力高卷之三

六三



星月夜力高卷之三

六三



多々通下しるるんと程尋らるる披露及へ由下向せざる振子まれば園へ  
福送る吟味せめ京都不在車も悉く尋獲し生捕りたる平  
定お及び多時お芝原長保も家の子五人引つて京都を逐電し多か  
播磨の梶原の領分多くあるも急定討つ向べし西國への退がて先  
江原をさうと急定が何國をめぐるとも由なく二月七日の朝京を以て  
二日二夜さめしとさしひあれた九日の晩景あは江尺富山の庄に至り  
餘り勞瘦しるる農家お主寄郎等も命し一宿をとるが主  
ぼくその群をえらふおまへ入るる五人は且しとてのりげぬお  
士不審おおひしるが觸示さるるぬの旅人うらんとおは此ぬの旅人を  
止る宿おゆらぬお貴客とてた方とて集りてとてさ食物ゆらぬれば宿の  
かめつとちやあを長保をを笑つて折入るるおの言分と去るる

子細ゆつと閑家を尋ひ我く不自由と覚悟する達と一夜を明さ  
せゆと再三ちゆへを非るる内お清し粟稗支りの煎飯を以て食する  
お身群お空服の時もへ日比の味ゆり耳く覚え主役五人は  
山お食しちか付休息し亭主此草の群を考ふる兼食とて  
人物おゆらぬお娘を群あつ飽すて食しぬお苦しと友と推量し  
近江の定綱が下知ありぬゆと長保がみぬ末くすて觸ま若性した者  
を注進おるがと苗蓋ののち首を刎んと有るもへ正しく此草のこころ  
ん届むんが後日の眼怖しとて此説を所人とするぬお當所へ佐未  
の一族木村源三お思の所傾りて養子太郎信実京都への元  
番おるる町く里く折く穿鑿するもへお件の亭主信実お此ゆ  
住進とをさしつて信実長保を生捕りとおひしが夜中民家乱妨



せんも不便なり。明日出羽丸を途中あり搦んと主よりそのはや合  
 たるが家内を痛く下さる候有らむと悦びる。信実との夜此家の裏表  
 お番を付。明る候近しと待る長保主役をさるべ。閑寂るれば人  
 由あるより。ゆるく労を憩夜深お立去らんと十合せふ。此比の労あり  
 熟く睡。あは夜を明し。眼お目を覚し。神由とて。周章と出羽を。  
 信実羊途不同のし。お芝原お遠るれば信実郎亦數十人引を  
 前速お進。爰お其由ら。芝原後と見えたり。竹園をさるる候  
 や。お近何ものあり。路を立去らむや。故あり在勢を捨逐電せり  
 りゆ。其お命に初湯を尋せしめぬ。いづくに出會へ。出入丸之速お  
 歸京有る。中伏せしよ左の理不尋お同強とて呼く。勇動せ  
 へ討るん景。爰力へ長保大お致。味方の主役五人。旁に在るれば。

敵せんを叶のど。退らんも前後を塞ぎ。道るる道るる。長保  
 覚悟お究。必卒おし。あはづら。びのちも京都へ歸り。退去の子細  
 やべし。某更お別をう。と屈伏し。くええたる。お信実神妙お。お  
 大法く兵具を渡し。某とて。お出末の。とサセ。長保を。お  
 く。お刀お甲お皆見出し。るゆへ。信実家來お取持せ。繩を。お  
 せ。おれ。お勇士の。情。お中用捨。と。芝原主役を。真中。お  
 蔵。守護。と。直お京へ。執伯。又。定綱。お亭。お到り。あ。を。速る。  
 定綱。信実。お毎度の。勲。功。を。賞。又。夜。お入。お。お。嫡子。廣綱。を  
 以。仙。洞。へ。養。使。し。惟。親。親。の。許。へ。お。告。知。せ。信。実。お。手  
 柄。を。感。賞。せ。と。る。翌。日。仙。洞。より。芝。原。へ。謙。倉。へ。下。さ。と。命  
 せ。る。お。謙。倉。の。使。臣。足。立。平。三。親。長。芝。原。を。と。て。謙。倉。へ。下。向



とむ大切の囚人なれば、海次の守護、赤信、実由、同道、あつ下向と  
ふしと、皆く二月二日、京を立回、廿五日、孫倉へ、糸見を、是、親、我、惟、親  
か、見、果、あ、と、信、実、先、年、十五、歳、あ、と、江、州、ふ、尋、く、と、十、年、斗  
孫、倉、へ、ゆ、と、依、く、実、又、盛、綱、始、一、族、お、對、面、せ、め、ん、と、の、年、ひ、あ、う。  
実、綱、由、此、お、め、ま、と、ど、の、甥、の、り、の、遠、家、く、在、し、お、兩、人、が、斗、ひ、を、甚  
ほ、び、信、実、と、勿、論、郎、亦、中、を、初、班、を、取、給、せ、下、し、る。

星月夜頭晦録初編卷之三 畢



